

こじろいえん
古事類苑よりチョウやその幼虫、鳴く虫についての記述

【赤染衛門集】 草の中に蝶の死にたるを見て
浮き世には ながらへじとぞ 思えども 死ぬ蝶ばかり 哀しきはなし

【源仲正家集】 はかなくも招く尾花に戯れて 暮れゆく秋を知らぬ蝶哉

【新撰字鏡 虫】蝶 従頼反、蛺也、加波比良古。蛺 古來反、蝶也、加波比良古。

【新撰字鏡 虫】蛾 柯我反、蠶也、蟻也、安利、比々留。

【倭名類聚抄(わみょうるいじゅしょう) 十九 蟲彖】蝶(テフ) 兼名苑云。蛺蝶、頼蝶二音。
一名野蛾、形似蛾而色白者也。

【倭訓栞(わくんのしおり) 前編十七底】てふ 蝶をよむは音なり。相模(さがみ)下野(しもつけ)陸奥(むつ)にてふま。津軽(つがる)にかにべ、又てこな。秋田(あきた)にへらこ。越後(えちご)にてふまべつたら。信濃(しんりゅう)にあまびらといふ。かひこのてふは蛾なり。信濃陸奥上野(こうずけ)にひるといふ。西国(せいこく)にひるろうと云。伊勢(いせ)にひいろといふ。柳女郎(やなぎぢやう)と呼ぶ者あり、水蝶也。粉蝶(こなてつ)を放ちて、其止まる所に随て幸なるは唐明皇(たうめいこう)の古事なり。天寶遺事(てんぽういじ)に見ゆ。てふてふとまれ、菜の花(さいのな)にとまれ、なれもとまらば、我もとまらんとといえる童謡(どうやう)は古意(こい)を得たり。

【古今要覧稿(ここんようらんこう) 虫介】てふ蝶 てふ、一名をこてふ。古名をかはひらこといひ、俗稱(じやくしやう)をてふてふといひ、(中略)漢名(かんめい)のごときも數名(すうめい)ありと雖も通名(つうめい)は蝴蝶(こてつ)といひ、蛺蝶(てつてつ)といひ、蠶蝶(さんてつ)といひ、蠶(さん)ともいへり。説文(せつもん)によるに蝶(てつ)は俗字(じやくじ)のよしにて蠶(さん)を本字(ほんじ)となせり。然れ共、古來(こらい)より蝶字(てつじ)を以て通用(こつう)したり。又雅名(みやうめい)の如きは春駒(はるこま)といひ、野織(のおり)といひ、撻抹(たふく)といひ、探花使(たんけんし)といひ、或いは採花使(さいけんし)共、採花子(さいけんこ)とも目せるは名義(なぎ)皆同じくして、いはゆる蝴蝶(こてつ)の花(はな)に遊ぶとも、花(はな)に戯(あそ)ぶなどふるくより詩歌(しか)に詠(よ)むよりして、志(こころ)か名付(なづ)けせん。又戀花(こひはな)といふ目もあるは、もと蝶(てつ)は花木(はな)花草(くさ)中の毛蟲(けちゆう)尺蠖(せきかく)の類(るい)、或は蠹(く)蠹(く)老時(らうじ)に至(いた)りておのおの脱(だつ)して蝶(てつ)となる也。(中略)また此物(このもの)大小(たうせう)あり、大なるものは蝙蝠(こうもり)の如(ごと)く、故(ゆゑ)に蝙蝠蝶(こうもりてつ)の名(な)あり。小なるものは梅花瓣(ばな)にまがふありて翼(よく)に五色(ごしき)の斑文(はんぶん)あるあり。純白(じゆんぱく)純黄(じゆんわう)紫黒(むらさきくろ)青赤(あざか)色錯雜(しきさくさく)にして種類(しゆるい)はむべからず。(下略)

【和漢三才圖會 五十三 化生蟲】松蟲 正字未考 末豆無之(まつむし)
按松蟲(まつむし)蟋蟀(せつぱつ)之類(るい)。褐色(かっしやく)而長鬚(ながひげ)腹黄(はらう)黄、在野草(やぐさ)及松杉籬(まつしやうし)籬、夜振羽(よるふね)鳴聲(なう)如言知(ごと)呂林(りよ)古呂林(こりよ)。甚優美(せうべい)也。凡松蟲(まつむし)鈴蟲(すずむし)晝(ひる)難得(がた)得、夜照燈(よるてう)則(すなは)ち慕光(ぼくわう)來、捕(と)之畜(ちく)千蟲籠(せんちゆうろう)、以竹筒(たけとう)盛水(もり)投鴨跖草(おウセキノウ=つゆくさ)二三葉(にさんえつ)、每旦(まいたん)新換水(しんかんすい)及草、掃糞(そうふん)。其屎(そのし)如胡麻(こま)。大暑(たいう)以後(いご)始鳴(しやうめい)九十月止(くじゅうげつとど)。

金鐘蟲(きんしやうむし) 月鈴兒(げつすずこ) 俗云鈴蟲(じやくいんすずむし)
按此(あた)亦蟋蟀(せつぱつ)之類(るい)、眞黒(まじくろ)似松蟲(まつむし)、而首小尻大背窄(しやくせうせうせうせうせう)、腹黄白色(はらうはくしやく)夜夜鳴聲(よるよるめい)如振鈴(ごと)鈴、言里里林里(ごんりりりんり)林、其優美(せうべい)不劣(ふりやく)於松蟲(まつむし)

【本草綱目啓蒙(ほんぞうこうもくけいもう)】蠶ノ如クニシテ脊高シ長サニ寸許全身綠色兩邊ニ小黒星アリ目ノ如シ若シ身ニ觸ルレバ頭上ヨリ兩曲角ヲ出ス黄赤色ニシテ甚臭氣アリ

【古今要覧稿】琉球国にてははへるとよび蝶にまだらの文あるものはあやはへると稱呼せり

古事類苑は、明治政府により編纂が始められた類書(一種の百科事典)である。明治29～大正3年(1896～1914)に刊行された。古代から慶応3年(1867)までの様々な文献から引用した例証を分野別に編纂しており、日本史研究の基礎資料とされている。(wikipedia)

国際日本文化研究センター・古事類苑ページ検索システム
<http://shinku.nichibun.ac.jp/kojiruien/index.html>